

2012年度 第1回 全体研究会
「アジアで活躍する仏教指導者」 (第1回)

報告題目	インド亜大陸の伝統仏教と今後の展望
開催日時	2012年4月25日(水) 16:45-18:15
開催場所	龍谷大学大宮学舎 南翼2階 202教室
報告者	中村行明師
ファシリテーター	桂 紹隆(龍谷大学文学部教授・BARCセンター長)
コメンテーター	佐藤智水(龍谷大学文学部教授)
参加者	51人

【報告のポイント】

中村師は実践者の視座から、近現代インドにおける仏教の展開と、その今後の可能性について述べた。中村師は、報告題目にみる語句——「インド亜大陸」および「伝統仏教」——の説明を行ったうえで、それに対する自らの関心の起源、南アジアでの修行体験、そして寺院の経営について語った。

【報告の概要】

1954年に生まれた中村師は寺院の出身者ではない。渡印までの仏教との縁は、父上が或る宗門系大学において中国文学を講じていたくらいであった。高校を卒業後、大学へ進学した中村師は、カウンターカルチャーに触れ、インドを訪れる。中村師いわく、その旅行がそもそも成り立ったのは、当時、格安航空券が出回り始めるなど、国際交通機関の環境が改善されたためである。休学して一年間インドを放浪した中村師は、チベット仏教により得度し、後にスリランカ及び日本でも得度している。

以上のように自己史を述べた後、中村師はインド亜大陸における伝統仏教の歴史的な描写に努めた。インドにおける仏教は、12-13世紀の段階で衰滅することとなったが、19世紀においてその遺跡は海外の仏教(学)者の興味を呼び起こした。スリランカのアナガーリカ・ダルマパーラ、そして日本の大谷光瑞、河口慧海、岡倉天心などの活動によって、当時インドで仏教再興の動きが盛り上がり、様々な場所で寺院が建てられることになった。



1956年に、不可触民制度との戦いで知られるインドの政治家ビームラーオ・アンベードカルが、カースト制度から脱出するための方法を仏教に求め、死去する数ヶ月前に約50万人の被差別者とともに仏教に集団改宗した。中村師がインドにおいてかかわる伝統仏教はこのいわゆる「新仏教」と一線を画するものであると述べた。

中村師は1980年代、チベット難民仏教徒の要請により寺院の建立に取り組み、ニューデリーなどの大都会ではなく、インド北部のラダック地方に1991年にそれを完成した。同寺院は日本の宿坊システムを取り入れており（ただし飲酒および肉食は禁止）、運営費の大部分はそれによっているという。中村師は中国やASEAN（東南アジア諸国連合）加盟の諸国は、人口における仏教徒の割合が多いことを指摘し、その諸国の経済的発展によって仏跡の多いインドへの訪問を希望する仏教徒も増加するはずであり、ツーリズムとの関係において、今後のインド仏教の可能性を考えることも出来るのではないか、と述べた。

【議論の概要】

佐藤智水氏は、自らが初めてインドを訪れた1980年代の当国の状況と、それに比べて裕福な国となった現在との相違について述べた。中村師が取り上げたASEAN諸国の経済的発展の話の踏まえ、インドにおいて寺院を運営する様々な困難に触れた。佐藤氏はまた、今後のインド仏教に対する新仏教徒の役割についても訊ねた。前者に



関して中村師は再びツーリズムの可能性について述べ、後者はもう少しデリケートな問題として考える必要性を示した。現況批判とその打破という意志の下で改宗した新仏教徒は、自己主張も強く、伝統仏教の枠組で捉えるのに様々な困難があると指摘した。しかし、新仏教徒の二世や三世はその先人たちとすでに異なる世界観を有しているため、それが今後、新たな展開を見せる可能性もあると述べた。